

座長のことば



座長
小椋 祐一郎 先生
名古屋市立大学大学院
医学研究科視覚科学

ご略歴

1980年 京都大学医学部 卒業
1985年 イリノイ大学医学部眼科 留学
1986年 京都大学医学部 助手
1989年 イリノイ大学医学部眼科 留学
1993年 京都大学医学部 講師
1995年 京都大学大学院医学研究科 助教授
1997年 名古屋市立大学医学部 教授
2002年 名古屋市立大学大学院 医学研究科 教授
現在に至る

糖尿病黄斑浮腫は、糖尿病患者の視力障害の原因として最も頻度が高く、黄斑機能が直接障害されるので、Quality of Visionの低下にも直結する。1980年代に行われた米国のETDRS(Early Treatment Diabetic Retinopathy Study)により黄斑部への局所レーザー光凝固が視力障害を防止する効果のあることが報告されたが、光凝固によって視力が改善する症例はあまり多くなく、術後の凝固斑拡大による合併症も問題となっている。その後、糖尿病黄斑浮腫に対して硝子体手術やステロイド剤・抗VEGF剤による薬物治療などの有効性が報告され、治療戦略が多様化してきている。

今回のセミナーでは、東京女子医科大学の須藤史子先生には「糖尿病白内障患者の黄斑浮腫に対する治療戦略」として、白内障手術後の予防的戦略と治療的戦略について、トリアムシロンアセトニド製剤の臨床試験データを踏まえてお話しいただく。また、長崎大学の鈴間潔先生には「糖尿病黄斑浮腫のメカニズムと治療戦略」として、ステロイドの作用機序と実際の治療ポイントについて、豊富なご経験をもとにお話しいただく。

糖尿病白内障患者の黄斑浮腫に対する治療戦略



演者
須藤 史子 先生
東京女子医大・埼玉済生会
栗橋病院 眼科

ご略歴

1988年 東京女子医科大学医学部 卒業
1992年 東京女子医科大学医学部大学院 修了
東京女子医科大学 糖尿病センター眼科 助手
2001年 東京女子医科大学 眼科 助手
2004年 東京女子医科大学 眼科 講師
2006年 米國グループランドクリニック
コール眼研究所 留学
2007年 東京女子医科大学 眼科 講師(復職)
埼玉済生会栗橋病院 眼科部長兼任
現在に至る

黄斑浮腫は失明に至ることはないものの、中心視力の低下から生活の質に影響を及ぼす。糖尿病患者では糖尿病網膜症の進行とともに糖尿病黄斑浮腫の合併率も高くなるうえに、糖尿病患者の高齢化により白内障も併発している場合が多いため、糖尿病白内障患者の黄斑浮腫対策が必須のものになってきた。

糖尿病黄斑浮腫の治療には、レーザー光凝固、硝子体手術、トリアムシロンアセトニドの局所投与(適応外)、抗VEGF薬硝子体内投与(適応外)が行われてきているが、数々の無作為臨床比較試験の結果からは混沌とした現状であり、これという決定打が明らかになっていないのが実情である。

私達が日常臨床で実践できることとして、まず白内障手術における周術期において、黄斑浮腫を作らない、悪化させないという予防的戦略がある。次に2012年11月に糖尿病黄斑浮腫治療薬として承認されたトリアムシロンアセトニド製剤(マキュエイド)を使用するという戦略である。国内臨床試験により糖尿病黄斑浮腫患者に対する有効性と安全性が確認され、硝子体手術時の可視化に加え、糖尿病黄斑浮腫に対する効能・効果も追加承認された。この試験概要から得られた治療戦略についてもご紹介したい。

糖尿病黄斑浮腫のメカニズムと治療戦略



演者
鈴間 潔 先生
長崎大学医歯薬学総合研究科
眼科視覚科学

ご略歴

1993年 京都大学医学部 卒業
1998年 Joslin Diabetes Center,
Harvard Medical School 留学
2001年 京都大学医学研究科眼科学 助手
2006年 静岡県立総合病院 眼科長
2008年 長崎大学医歯薬学総合研究科
眼科視覚科学 講師
2010年 長崎大学医歯薬学総合研究科
眼科視覚科学 准教授
現在に至る

糖尿病網膜症において黄斑浮腫の合併は不可逆的な視力障害をもたらす。高血糖、酸化ストレス、leukostasisなどにより血管透過性が亢進し黄斑浮腫を来すと考えられてきたが、近年、血管透過性の亢進と血管新生の両方の作用をもつ血管内皮増殖因子(VEGF)が糖尿病網膜症や網膜中心静脈閉塞症、加齢黄斑変性の病態に深く関わっている事が明らかとなり、そのVEGFを選択的に阻害するような治療法が実用化されるようになった。

また一方ではそのような黄斑浮腫に対するステロイド治療の有効性も非常に注目されてきており、眼局所の薬物治療としてトリアムシロンと光凝固・抗VEGF療法・手術療法の併用などが広く行われるようになり治療成績の向上をもたらした。現在いくつかのステロイド製剤の黄斑浮腫に対する治験も進行中である。

本セミナーではステロイドの作用機序と網膜硝子体疾患の発症・進展に関与する各種情報伝達分子に焦点をあて、最近の我々のデータや実際の治療のポイントについても解説したいと考えている。